

自己変革と新たな「困う部隊」の 創出に向けて—— 明文入管ヨ

一、我々は自らの生活領域をどの様に對
象化し、その生活領域を何と構外として変
革しようとしているのか——我々ほどの
激進的闘争を言わうと、以上の構外を目的意
義的に追求していくことが必要であるだろ
う。明文入管ヨはこの間の地区Mの様態か
ら前述の命題を明らかにする視点を提起し
ていきたい。前述した命題を説明する手
かりとして、我々自身の生れ育って来た「
史性（主要に至其ヨMの提起したもの）」と
その彼登場した大新ヨ争の位置、そしてこ
の間、連綿的闘争を提起されていくマツ
其ヨ争の基本的な位置付けを言わうと
必要があるだろう。

69年11月に極めて大きな潮流として登場
した至其ヨMは次の様な展開を持ってヨ
扱われた。大学内秩序管理（管理）（学
生の即時的要求）——管理者と教育者とい
う二元説的立場（近代管理主義）に對する
起て直して「学問」とは何か、大学とは何か
（C）、極めてラディカルな「問」し、そ
の根本資本主義社会の根底的矛盾の集約と
してあった。体制「に對するヨ」（街頭政
治ヨ争） 至其ヨMは即時的要求を背景
により高度な政治性、革命性を獲得せんか
為、政治ヨ争としてそれを外化させた。こ
の後に学生ヨ争、主観主義者のヨ、
は敗れるべくして敗れた。このヨ争の過程
の中でこのヨ争性を乗り起せんとして

あの自己否定の論理、加害者、被害者の認
理が生まれ、しかもそれは実態を待たず、
我々はこの至其ヨMを再度抱括しつくり、
更新するヨ争を展開せねばならない。
「学園ヨ争の根柢にあるものを更体化し
組織化し、反抗するエネルギーを社会ヨ争
政治ヨ争に不断に転化していく事を要請さ
れている」とよく云われた。しかし学園ヨ
争の延長に政治ヨ争はないと云う事はほ
きりと確証する必要がある。おなわら自
らの生活と政治を果して一致しているのみ。
自然発生的に登場した大敵が自らの生活（
「史性」と現存在）を忘却して衝動に依つた時
それは内的必然性を喪失した。自己否定の
思想的には正しかった。しかし自らの生活
を確証する、自らの何を肯定することから
始めればよいと、という具体性を確証する事
なく、衝動へ出る、という歴史性を構外
とした自己否定はMの停滯（ゲイナミズム
の喪失）と共にその力を失ったのだ。
至其ヨMは、
(A) 御座機構としての、支配構造としての
大学解体、(B) 細分化（知）派の
伝達形式としての教育の解体、(C) (A)、(B)
を統合して大衆との新たな人民の交通形態
の獲得、を目指した。それを完遂するM説
として反大学Mを提唱された訳であるが、
しかしこれもまた、自らの存在する基礎の
対象化がMとして表現され、それ故、極

めて一般的に、具体性の欠いた「一体」の
ような階層に向け、大学を解体していく
という事。その階層と自らの存在する階層
の差を把握し得ず、ある意味に於て主観
主義になり、ならざるを得なかった。現在
大新ヨ争を把え返してみると、この至其ヨ
Mの潮流を極めて正確に踏み、しかも至其
ヨMの構外をゲイナミズムをし得ていない。
一、大学内秩序再編に對するヨ、
一、教授に對する二元説の追求と、自らの

二元説的ヨ、
一、新たな交通形態の獲得
以上、三項にわたる大新ヨ争は我々女学生
に、至其ヨMを総括し、更に目的意識的にヨ
扱われねばならない。大新ヨ争を構外す
る要因として、明文ヨ争以後初めて登場し
た唯一の学内矛盾である事、そしてその
学内矛盾が至其ヨMを象徴されるとも
に、再び衝動に陥り行った事から上
げられる。したがってヨ、いは当然至其ヨMの二
元説と見做して展開された。おなわら如何
に「学問」として、管理—被管理関係と自
らの存在する階層と近いヨ、そして新た
な交通形態創出のヨ、（主要に書き字と読
み字の関係性）これを表現していくものと
してマツ其ヨ争連絡会創出を持つてその
階層形態を創出した。しかし我々はほっき
り確証しなければならぬ。この方法を持
つてしては、大新ヨ争をより発展的に展開す
る事は出来ぬ、より情況に照看した、真
正に「理論的展開」はなし得ない事を。以上

の争を目的意識的に追求していかなければ
ならないとしても、それ以前に我々女学生
しなければならぬ課題は存在する。それ
は結果論的関係性の問題である。結果
論的関係性自らの課題を何処に有え、それを
持つて大新ヨ争マツ其ヨ争に結果せねば
ならない。
以上述べた様に、大新ヨ争をマツ
其ヨ争としてヨ、扱くと共に目的意識的にそ
のヨ、を発展させる必要があるだろう。ど
れは何々のヨ争主体が自らの存在位置を乗
り起え、更にその一人一人が地域性Vを
獲得していく事であり、しかもそれをMの
ゲイナミズムとして登場する潮流を作り出
さねばならない。69年11月—77年の自決
運動協定調印という一連の政治情況は白米
面筋田主義社会世界的「アリア」的再編を完
遂しようとする一連の流れである。しかし
我々は未だ自らの主体形成を成し得ず、勿
論代を担うべきヨ争主体も虚着し得ていな
い。この脱迷の中にあつて「新間」を媒介
にして結果せんとしているマツ其ヨ争も亦
り「革命的」より「自立」した視察と方法
を確立しなければならぬ。人表現をより
V/MとするVという二元説を克服して行
く為Mを媒介としたその連絡を確立しな
ければならない。何々のヨ争主体の革命性
をより普遍的なものとして、表現し、実践

して行ななければならぬと考へる。それを遂し得る程度とは我々の主体変革の問題であり、人民のどの部分に依頼しようとするのなという問題である。そもそも帝国内の存在はアジア人民の植民地人民の存在に基きおいてゐる。そして帝国内本国内に於て侵略的・反革命的の構造はどこに集約されてゐるのな、明らかに帝国内主義本国内の底辺構造を侵略的・反革命的の行く手を左右する根本になつてゐる。まさに底辺構造は革命の反革命的の衝突に立つてゐる。しかも我々の大部分を管む市民社会はそれを経済的、政治的、文化的に抑圧するといふのな故に民主主義の基本構造となつてゐる。全共闘Mは自己対象化、変革して行くといふ意識性を持ち得た。しかしながら具体性を抜きにして変革を語つたところを我々の変革はあり得ない。本復的に底辺構造からの解体を抜きにして、一切の人間性はない。我々はこの極めて根本的位序に依頼せねばならないのな。それを表わすものとして全臨闘争を見とみよう。全臨闘争の斗いは自らの生活を叩くと同時に総資本と総労働の関係を覆寫に入れ、構造的組合である発達、輸送、販売の統一労働を組織していった。その中で全臨闘争は本工と臨時工の立場性についてつた。本工臨時工を統一の闘争Mを未だ形成し得ていない本復的問題は、本工労働者な差別階級により一定程度の生活水準を身えられ、それ故に自己保身に陥

り、帝国内主義の矛盾を突感として肥えられず、そして下層の労働者の矛盾を一切見えない。しかしながら前者は労働者な階級的に團結しなければ総資本に勝つてゐないことを知つてゐる。L

まさに、現在の社会構造は日々バラバラに分断され、他を排他する排外主義に陥つてゐる。労働運動としてその例外にはなりえない。資本主義の矛盾は排外主義となつて現出し、更にその排外主義は底辺構造である。これはあるほど鋭い矛盾となつて現れてゐる。底辺を構成する部分は、被差別部落人民、沖縄人民、在日朝鮮人民であり、そこにこそ帝国内主義本国内の存在がある。我々は沖縄闘争を斗い抜くにあつても、この社会構造をいさぎよく見とおす必要がある。L

沖縄と並行して、「本土」沖縄を連なるLと云われるな、我々は沖縄の歴史性と現存在を認る事なしに、そして、その歴史性と現存在を認る事なしに表現されてゐるのみ、はつきり犯して行く必要がある。まさにその表現としてあるのな在日本土沖縄出身者の斗いであり、その背後に居る多くの沖縄出身の集団就版で「ヤマト」に渡つて来た人々の存在である事を忘れてはならない日本人、日本国民といふ概念を粉砕する斗いとして沖縄解放闘争があるといふ事を欠落させざるならば本土、沖縄を貫く沖縄闘争は一回主義的、民族的な排外主義へと堕落する事となるだろう。我々は以上の復安をいさぎよくつた地区的な斗いへ反入管、

反侵略、反排外主義の斗いを展開して行く。
まさにこの段階を持つて、自らの存在を確証して行く斗いは初時代の主たる潮流へと転化して行く必要がある。

M E M O I R